論 文 の 内 容 の 要 旨

論文題目

エコロジー経済学と自由主義をめぐる思想史的研究
―20 世紀両大戦間期における社会エネルギー論、ノイラートおよびハイエク―

氏名　桑 田　　学

　本論文は、「エコロジー経済学 Ecological Economics」の思想的系譜と経済的自由主義との間の失われた論争をたどり直すことを通して、人間の経済の存立条件としての自然的基盤への関心が、「自由と計画」、「市場と国家」をめぐる 20 世紀初頭の経済思想において、どのような立場や社会構想を形成していたかを、思想史・理論史の観点から追究しようとするものである。

　本論文が研究対象とするエコロジー経済学とは、人間の経済を市場現象に局限せず、自然生態系と社会との間の物質代謝関係の全体性のなかで捉えようとする異端の学派である。エコロジー経済学が本格的な学派形成を開始したのは、N.ジョージェスク＝レーゲンの『エントロピー法則と経済過程』(1971 年)の出版以後、とくに環境問題が地球規模で深刻化した 1980 年代以降の時期とみてよいが、その思想史は、現代の主流的経済学に比べても、かなり長い射程を有することが明らかになってきている。決定的な契機となったのは、S.カルノーに始まる熱学思想・エネルギー論の飛躍的進展と C.ダーウィンが主導した生物科学の発展であった。これらの自然科学上の進展は、限界革命期の経済学が追従していた力学的・機械論的自然観の解体を招くものであり、自らの存立条件である自然の実在を無視する 19 世紀の市場社会、そして自由主義経済学のユートピア性に対する根源的な批判につながる視点を社会科学上にもたらすに至ったのである。その具体的な現れとして、世紀転換期のヨーロッパを中心に形成されたのが、エコロジー経済学のプロトタイプともいうべき「社

会エネルギー論 social energetics」であった。

だが、こうした動きに自由主義の側もまったく無関心であったわけではない。自然科学に依拠する経済学批判の試みに対して、その科学方法論や経済社会の統治のあり方をめぐって痛烈な反批判が行われたのである。その中心にいたのが、20 世紀を代表する自由主義思想家フリードリヒ・ハイエクであった。ハイエクは、社会エネルギー論を自然科学と社会科学を混同する「科学主義 Scientism」の一系譜として取り上げ、ファシズムや全体主義と「社会工学」的思考を共有する、自由な社会の敵として同定したのであった。たしかに社会エネルギー論は、およそ資本主義に否定的な立場から、自然の実在から遊離した市場経済や貨幣制度のあり方を批判し、経済生活の意識的・合理的な制御を強力に根拠づける面をもっていた。この点で興味深いのは、社会エネルギー論の興隆が、20 世紀の両大戦間期に及んだ「社会主義経済計算論争」の一つの遠因ともなっていた事実である。計算論争は、資本主義と社会主義との体制選択をめぐる論争であるが、そこにはこれまでまったく見過ごされた位相として、経済の物理的な埋め込みという事実に由来する「リベラル・ユートピア」批判という文脈が存在したのである。

この文脈の中心に位置したのが、ウィーン学団の統一科学運動を率いた社会科学者オットー・ノイラート(Otto Neurath, 1882-1945)であった。計算論争の研究は、多くの場合、L.v.ミーゼスの 1920 年の論文「社会主義的共同体における経済計算」から始まるが、この論文が批判の対象としていたものこそ、その前年に発表されたノイラートの論稿集『戦時経済を通して自然経済へ』(1919 年)であった。同書において提示された市場経済に取って代わる「自然経済 Naturalwirtschaft」のヴィジョンは、経済過程を生物-物理的な過程として把握する社会エネルギー論的な試みの、いわば集約点をなし、またそれを「経済の意識的統御」を目標とする社会工学の実践と露骨な形で結合させている点で、同時代の自由主義者の格好の攻撃対象となったのであった。

計算論争は、市場社会主義の実行可能性をめぐる「新古典派 対 オーストリア学派」という対立の中で、〈市場〉についての認識に飛躍的な進展をもたらしたが、他方で論争の初期の参加者であったノイラートや K.ポランニーが背負っていた、経済の自然的・社会的な埋め込みや、〈経済〉と〈市場〉の合理性の分裂といった 20 世紀的課題は、従来の研究史では、ほぼ完全に見失われることとなった。この見落としは、二つの意味で、その後重大な瑕疵となって表出したとみることができる。第一に、自由主義社会、社会主義社会の双方で、1960 年代以降、汚染と環境破壊、資源・エネルギー枯渇などの形をとって、経済領域とその外部領域との境界面で深刻な問題を噴出させ、第二に、それにもかかわらず、経済学の主流は、これらの問題をも基本的には「外部性による効率的な資源配分の失敗」(＝市場の失敗)という価格機構の例外的現象として見るという認識論的障害に陥っている。したがって、この論争を振り返ることは、思想史研究上の意味を越えて、市場社会の資源的・環境的限界を理解する上でも、決定的な意味を持つのである。

本論文では、およそ以上のような問題関心から、世紀転換期から両大戦間期にさまざま

に問われた〈経済なるもの〉とその合理性、そして「自由／権力」、「社会／自然」といった自由主義に内在する二分法の限界について分析を試みている。

本論文は、主に科学方法論に焦点を当てた第Ⅰ部(第1章および2章)と、経済の統治の視点から社会主義計算論争の再構成を試みた第Ⅱ部(第3章～5章)から構成されている。

第Ⅰ部では、世紀転換期に形成された社会エネルギー論を、ジョージェスク＝レーゲンのバイオエコノミクスとの問題関心や経済学批判の視角の重なりを解明しつつ、それらが同時代の経済思想に持ち得た積極的な可能性について論じた。

第1章では、ハイエクが社会エネルギー論者として直接言及した三人の科学者(パトリック・ゲデス、ヴィルヘルム・オストヴァルト、フレデリック・ソディ)を中心に、19世紀中葉からの熱力学と生物学の進展が社会科学に与えた影響をたどり、そこに現代のエコロジー経済学につながる思想の淵源があったことを明らかにしている。

続く第2章では、社会エネルギー論が背負っていた課題や彼らの方法論上の特徴を踏まえ、ハイエクの『科学による反革命』(1952年)に収められた二つのテクストを中心に、彼の科学主義批判に批判的検討を加えた。社会エネルギー論が試みた自然と社会の統一的把握は、ソディの主著『デカルト派経済学』(1922年)という名が象徴するように、「社会の自然科学」を志向する面を持っていたが、しかしそれは、熱学を基礎とする点で、限界革命以後の経済学が歩んだニュートン力学の機械論的な世界像・認識論をモデルとした経済学の科学化とは全く異質であり、むしろそれと鋭く対立するものであった。こうした視座から、ジョージェスク=レーゲンにつながるエコロジー経済学の思想系譜を、ハイエクとは異なる、もう一つの科学主義批判の系譜として読み直している。

第Ⅱ部では、視点を両大戦間期の経済計算論争に移し、ノイラートの自然経済論を軸に、現代のエコロジー経済学につながる経済問題の認識が、市場と計画をめぐる論争上に、どのような経済の統治構想として現れたかを検討している。新古典派とオーストリア学派との論争に視野を限定せず、ノイラートに加え、ポランニー、K.W.カップ等、異端派のテクストを位置づけることで、論争史の射程を社会制度や自然生態系を含む「広義の経済」の統治の問題にまで広げて、論争で問われた経済問題の多様性を分析している。

第3章では、ノイラートの異端的な経済思想を、「自然経済」にかかわる様々な基礎概念を分節化し、その特質(比較経済論、カタラクティクス批判、力学的方法への批判、反功利主義)を明らかにした。ノイラートの徹底した経験主義的な経済学は、具体的な人間の生を成り立たせている複雑な自然的・社会的な諸条件を、貨幣や効用といった何らかの単一基準に還元することなく、可能な限り複雑なものとして捉えようとしたところに、他に類例を見ない独自の視角を有している。

第4章では、ノイラートの社会工学に対する20年代のミーゼスおよびウェーバーの批判、そして30～40年代のハイエクのテクストを検討し、自由主義における経済問題の認識の変容について分析している。本章ではとくに、ハイエクが主観主義に立脚する知識論の展開を通して、新古典派の一般均衡論によって主導された狭義の計算問題を離れ、自由主義的

な統治実践にかかわる問題へと論争の土台を転換させたことに注目し、ハイエクが社会工学に対してミーゼス、ウェーバーとは異質な独自の問題を提起していた点を確認した。

第 5 章では、ノイラートの社会工学と統一科学プロジェクトを、ハイエクの自由主義的な統治と対置される、〈物理的に埋め込まれた経済〉の統治実践として読み直し、それが市場と経済の分裂と再統合、そして「自由のための計画」という同時代の課題にどのように応え得るものであったかを分析した。ノイラートとハイエクとの間で交わされた 40 年代の書簡や、ハイエクに向けたノイラートの最晩年の草稿などを手掛かりとして、両者の合理主義や知識の論じ方、そして自由と経済秩序のあり方に関する思考の重なりと差異に注目しながら、ノイラートの非市場社会(＝自然経済)のヴィジョンが、ハイエクの設計主義批判にいかにして対峙していたかを明らかにした。

終章では、思想史的検討を踏まえ、環境問題の登場によって生じた、人間の基底的な生存基盤に向けた介入や統治(＝エコロジー的統治性)の不可逆性と両義性について論じ、これを批判的に分析していく上で「社会／自然」、「自由／計画」という単純化された二分法を乗り越えていく必要があることを示唆した。